富士の民話 あれこれ

浮島沼の 沼のばんばあ

浮島沼が広々とした大沼だったころ、夕方から夜にかけて、低く太いうめき声が沼のどこからともなく聞こえました。これを沼の周辺の人たちは、「沼のばんばあ」と呼んで恐れていました。今回は、「沼のばんばあ」のお話を紹介します。

昭和15年ころの浮島沼。当時、この周辺の水田は、腰から胸まで埋もれてしまう水田がかなり見られ、ドブッタなどと呼ばれていました。

現在の浮島地区の田植え

昔々、浮島村にかわいい子供連れのおばあさんがやってきました。おばあさんは、村人たちから物をもらいながら、暮らしを立てていました。

村人たちは、かわいい子供に同情して物を与えていましたが、たび重なるにつれて、おばあさんを毛嫌いするようになりました。そこで、おばあさんは、人里離れた沼のほとりに住むことにしました。

そして、長雨の続いたある年の六月、特にひどく降った雨のため、おばあさんの家は、一晩のうちに流されてしまいました。流れはどんどん速くなり、子供の姿も見えなくなりました。おばあさんは、流されながらも子供の安否を気遣い、「ボーボー」と子供を呼び続けました。でも返事はありません。そして、大きなうねりにのみ込まれ、子供もおばあさんも、とうとう死んでしまいました。

それからというものは、夜になると、おばあさんが子供を呼んだ「ボー、ボー」という声が沼から聞こえるようになりました。村人たちは、この声を「沼のばんばあ」と呼び、恐れていたということです。

私が子供だったころは、浮島沼が遊び場でしたね。夏になると、フナやドジョウ、ウナギをとって遊んでいました。でも、昔の沼は深みがところどころにあって、とても危険でした。

それで、祖母からよく「暗くなると沼のばんばあに連れていかれて、お尻のこう門を抜かれちゃうよ」と脅されたものです。事故に遭わないよう、深いところには気をつけるようにということと、稲を傷めたりしちゃだめだよということだったのですね。また、だだをこねたりして怒られたときにも言われました。今から考えると、「ボーボー」という声は、食用ガエルの声だったんじゃないかなと思います。

この話は、もう知っている人も少ないのでは…。今の子供たちは、忙しくて沼で遊ぶこともしませんね。

浮島沼の近くに住む
高橋 武次郎 さん（境）

こちら編集室

先日、町内会で害虫駆除の消毒を行った。しかし、道路や空き地などに、たくさんのごみが捨てられていたのにはビックリ。結局、ビニール袋を片手にごみを拾いながら消毒を行った。6月は、市民一人一人の環境に対する意識を高める「環境月間」。これを機会に皆さんも環境について考えてみませんか。

ところで、消毒後、また仲間と一杯飲んでしまった。最近、運動不足と連日の飲酒がたたって、少し動くとどこそこ痛くなる。しかも、太鼓腹。いい加減にこんな生活から脱却しなくては…。（大だぬき）

人　口　235,110人
男　117,190人　女　117,920人
世　帯　75,646世帯　（5月1日現在）
編集・発行　富士市総務部広報広聴課
静岡県富士市永田町1-100　☎51-0123

広報ふじは再生紙を使用しています